

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月11日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21792169

研究課題名（和文） 日本における患者-看護師間の対人援助関係の構築・促進・維持に関する看護技術の特徴

研究課題名（英文） Nursing skills unique to Japanese culture for managing interpersonal relationships between nurses and patients

研究代表者

田所 良之（TADOKORO YOSHIYUKI）

千葉大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：50372355

研究成果の概要（和文）：①日本での看護師経験をもち、かつ、海外において看護師としての経験をもつ日本人看護師、②自国など日本以外の国で看護師経験をもち、かつ、日本において看護師あるいは看護研修生（FTA:Free Trade Agreement（自由貿易協定）/EPA:Economic Partnership Agreement（経済連携協定）等）として経験をもつ外国人看護師、③FTA/EPAで外国人看護師を受け入れた医療現場において指導にあたった日本人看護師の3つの対象者（群）にインタビュー調査を行い、それぞれの対象者（群）から、日本における患者-看護師間の対人援助関係の構築・促進・維持に関する看護技術の特徴が抽出された。

研究成果の概要（英文）：The interview investigation were performed in this study for three following groups; (1) The Japanese nurses who has the experience as the nurse in both Japan and foreign countries, (2) The foreigner nurses who has experience as a nurse in his/her own country, and who has experience as nurse or nurse trainee under FTA/EPA in Japan and (3) The Japanese nurse who are/were an instructor of the foreign nurse under FTA/EPA in the healthcare setting in Japan. The nursing skills for building, promoting and maintaining the interpersonal relationship unique to Japanese culture especially between patient and nurse are shown.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学、基礎看護学

キーワード：対人援助関係、患者-看護師間、看護技術、日本文化

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本における看護の理論や技術・教育は西洋看護の影響を強く受けているものの、特に日本の文化社会・医療組織において日本人患者-日本人看護師間で看護師が用いている対人援助技術には、言語化されにくい日本

独自の文化が色濃く根付いており、それは十分に解明されていない。

(2) 看護における対人援助関係は、国内外共に精神科看護領域で語られることが多いが、精神科領域での対人援助関係は、精神疾患を

もった対象者との治療的関係であり、それ自体かなり特殊なものである。

(3) 日本において用いられている対人援助関係に関する看護技術について、その文化の中でのみ実践している者が、その特性・特徴を技術として表現することは困難であると考えられ、それらに感受性の高い集団を対象にして調査する必要がある。

(4) 山本ら(2007)は、海外で働く日本人看護師を対象とし、日本・米国・英国・スウェーデン・タイ・韓国における在宅看護の比較を行った。

(5) 田所ら(2007, 2008)は、海外の医療専門職で、日本の医療系大学院に在籍する在日外国人(エルサルバドル・アルゼンチン・モンゴル・中国)を対象とし、日本の看護における対人援助関係に関する調査を行った。

(6) 田所ら(2007, 2008)は、日本の大学院に留学中の中国人看護師を対象とし、日本人の看護における対人援助関係に関する調査を行った。

(7) 日本の看護師が行っている対人援助関係に関する看護技術に感受性の高い対象者としては、以下の3群が考えられた。

① 日本での看護師経験をもつ海外在住の日本人看護師

② 日本と異なる、異文化圏の看護師としての規範・経験をもち、さらに、日本においても看護師として、あるいは看護に携わる学生・研究者としての経験を併せ持つ在日外国人看護師

③ ②の外国人看護師を指導した日本人看護師

(8) 上記(7)②においては、日本とインドネシアの間において、FTA (Free Trade Agreement: 自由貿易協定) /EPA (Economic Partnership Agreement: 経済連携協定)により日本での看護師免許を取得し就業するために、インドネシア人看護師が来日している。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、看護師として、日本と他国のふたつの異なる文化体験をした対象者、FTA/EPAにおける外国人看護師の指導・研修に関わった対象者へのインタビューを通して、日本における患者-看護師間の対人援助関係の構築・促進・維持に関する看護技術の特徴を明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

### (1) 対象

本研究での対象者は以下の通りである。

① 日本での看護師経験をもち、かつ、海外において看護師としての経験をもつ日本人看護師

② 自国など日本以外の国で看護師経験をもち、かつ、日本において看護師あるいは看護研修生 (FTA/EPA 等) として経験をもつ外国人看護師

③ FTA/EPA で外国人看護師を受け入れた医療現場において指導にあたった日本人看護師

### (2) 調査方法

対象者をネットワークサンプリング等を用いて募集し、対象者を(1)の①~③の各群ごとに個別、あるいは、フォーカスグループでのインタビューを行う。インタビューの場所は、対象者の希望と都合を考慮し、研究者の所属する大学、対象者の所属施設など、対象者と相談にして決定した。インタビューは対象者の許可を得て、ICレコーダーで録音し、逐語録とする。

### (3) 分析方法

対象者の個別あるいはグループインタビューの内容を、質的帰納的に分析し、日本における患者-看護師間の対人援助関係の構築・促進・維持に関する看護技術の特徴を導き出す。

## 4. 研究成果

(1) 日本での看護師経験をもち、かつ、海外において看護師としての経験をもつ日本人看護師のインタビュー調査から得られた対人援助関係の構築・促進・維持に関する看護技術

日本での看護師経験を有し、かつ、オーストラリアに在住し、オーストラリアで看護師としての経験をもつ、あるいは、オーストラリアで看護学生として、10名の対象者が得られた。対象者は全員が女性であり、年齢は20歳代後半から30歳代後半(平均34.4歳)であった。日本での看護師経験は3.9年から10年(平均6.6年)、オーストラリアでの看護師経験は3年から5.5年(平均4.5年)であった(注:対象者のうち2名はオーストラリアで未就職のためオーストラリアでの看護師経験からは除いている)。10名の対象者の日本国内、オーストラリアでの臨床経験フィールドは、手術室から外科・整形外科病棟、内科病棟、高齢者施設、ナーシングホームまで多岐にわたっていた。10名のうち、2名はグループインタビューであり、他8名は個別にインタビューを行った。インタビュー時間は、1名(1グループ)につき1回で、1回60~90分であった。

インタビューから日本人看護師が患者-

看護師関の対人援助関係を構築・促進・維持するための看護技術に関して抽出し、質的帰納的に分析を行った結果、以下の5つのカテゴリと16のサブカテゴリが得られた。カテゴリを【】で示す。

- ①【専門家としての患者との良好な関係性を構築すること】
- ②【言葉のやりとりが十分出来ない場合でも、患者のニーズを理解してかかわること】
- ③【敬語・丁寧な言葉を用いたり、親切な態度で患者に接したりして、患者の立場を尊重すること】
- ④【ニーズの表出があいまいな状態であっても、全人的な看護ケアを提供すること】
- ⑤【患者との良好な関係を高く評価すること】

各、カテゴリには、2～5のサブカテゴリが含まれた。

(2) 自国など日本以外の国で看護師経験をもち、かつ、日本において看護師あるいは看護研修生(FTA/EPA等)として経験をもつ外国人看護師のインタビュー調査から得られた対人援助関係の構築・促進・維持に関する看護技術

FTA/EPAによって来日したインドネシア人看護師のうち、日本語でのインタビューが可能な者を対象者候補として選定した。しかしながら、候補者は、まだ日本語も学習中であり、病院等での勤務と日本語の学習ならび日本の看護師国家試験受験のための学習と時間的にも精神的にも多忙をきわめていたため、対象候補者を、既に日本の看護師国家試験を合格し、病院で看護師として就業しているものに変更した。

研究者のネットワークから、西日本のある病院で勤務するインドネシア人看護師1名を対象者として得ることが出来た。

対象者は、インドネシアで約5年病院看護師として経験を有していた。来日してからは4年目となり、当該病院の慢性期病棟で看護師として働き始めて1年弱が経過したところであった。

インタビューは1回で、約110分であった。インタビューはところどころ英語をまじえながらもほとんどは日本語で行われた。

インタビューから、日本人看護師が患者-看護師関の対人援助関係を構築・促進・維持するための看護技術に関して抽出し、質的帰納的に分析を行った結果には、以下の内容が含まれた。

①日本では患者と話をするとき敬語や丁寧な言葉遣いで相手を尊重する。それによって、近すぎず遠すぎない関係性を作ったり、患者が権利を持っていることを示す。

②看護師自らの自らの負の感情を抑えたりコントロールして、常に患者に優しく接する。

③日本では患者-看護師のお互いが環境を作る。お互いの遠慮する気持ちを理解してかかわらないとならず、言い合っただけで人間関係を壊してしまつたらよくない。

④日本人は小さい頃から、他の人とうまくいけるように関係を作ろうとする。

⑤患者も看護師も、何事も全てを言葉で表現してしまうのをよしとはしない。

(3) (2)の外国人看護師を指導した日本人看護師のインタビュー調査から得られた対人援助関係の構築・促進・維持に関する看護技術

FTA/EPAによって来日し、日本で看護師として就業しているインドネシア人看護師の指導担当者として、1名の看護師を対象者として得ることが出来た。

対象者は、看護師経験30年以上のベテラン看護師で、インドネシア人看護師の所属する病棟の管理者であった。

インタビューは1回で、約90分であった。

インタビューから、日本人看護師が患者-看護師関の対人援助関係を構築・促進・維持するための看護技術に関して抽出し、質的帰納的に分析を行った結果には、以下の内容が含まれた。

①長い療養生活の中でも、高齢患者に対して、人生の先輩として失礼にならないように丁寧な言葉を用い、また、慣れ合いになりすぎずに、わきまえて接する。

②昔の仕事や家庭環境なども理解しながら、現在の患者の状況をいろいろと推察して声をかけたり、かかわったりする。

③患者から不機嫌な対応を受けた場合でも、一度のかかわりで患者のことを決めつけてかかわりをやめてしまわずに、患者がそのように対応する理由を多面的な角度から考えて理解しようとする。

④患者の状況を理解するために、患者の体験している世界を模擬体験して、寄り添う姿勢を示す。

⑤親身になって、自分が患者に対して何ができるのか、何かしたいと考え続ける。

⑥援助の申し出に対して断られた場合でも、患者の真意を考えたり、援助の必要性を考えたりして判断する。

⑦元気だけでなく、ある程度冷静な、落ち着いた雰囲気がかかわる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

① Yoshiyuki TADOKORO, Yoshiyuki TAKAHASHI : Nursing Skills unique to Japanese culture for managing interpersonal relationships between nurses and patients. World Academy of Nursing Science(WANS) 2nd International Nursing Research Conference, 14-15 July 2011, Cancun(Mexico).

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

田所 良之 (TADOKORO YOSHIYUKI)  
千葉大学・大学院看護学研究科・助教  
研究者番号：50372355

### (2) 研究分担者

なし ( )  
研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし ( )  
研究者番号：